

## 中国語教育関係書の『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語について

李 夫平

**要 旨**：擬声語は独自の語群特徴を持つ品詞である。中国語擬声語が近代日本の中国語関係書において注目されていた現象が見られる。このことから、擬声語を中国語関係書の言語研究或いは近代日本の中国語教育の研究の視野に入れる可能性があるであろう。擬声語を扱った代表的な中国語関係書としては、『萬物聲音』<sup>1</sup>と『北京語の味』に注目する意義がある。この研究によって、近代日本の中国語関係書における言語の特徴を検討し、近代日本の中国語教育及びその関係書の状況を論じてみた。

結果として、『萬物聲音』と『北京語の味』の出版は35年の間隔があるにもかかわらず、中国語の学習書とする編纂の目的と方法は一致する点を持っている。近代日本の中国語教育は実用的中国語の習得に限らず、ある程度言語研究の努力もしていたことがわかる。また、近代日本の中国語擬声語は一面で中国語教育の性格や変化などを映しているため、その研究の範囲を広げ、深度を深め、更に多く、具体的な関連課題を入れて行う必要がある。

**キーワード**：近代日本の中国語関係書、擬声語、言語の学習、中国語教育

### 1 問題提起

#### 1.1 テキストの選択

日本の中国語教育は江戸時代の「唐話」<sup>2</sup>に始まった。明治時代になり、唐通事の廃止により、唐話も勢いを失い、北京官話を主とする中国語の教育が登場した。

明治期以降の近代日本の中国語教育の時期的区分について、六角恒廣（1984）は2つの時期に分けた。第1期は明治初年から1945年（昭和20）までであり、第2期は1945年（昭和20）以降1984年までである。日中関係に基づいた「中国語教育の意義ないし目的によって」、区分された時期の特徴は、「第一期の時期には、科学的方法論を基礎とした中国語学研究や中国語

---

<sup>1</sup> 『萬物聲音』の全称は『北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知』である。以下、『北京官話萬物聲音附感投詞及音須知』の略称として使用する。

<sup>2</sup> 徳川幕府の鎖国令（1635年）により鎖国時代に入った6年後（1641年）、中国、オランダとの貿易交流のために、長崎の港は開放された唯一のところである。中国語の対応のために、「唐通事」という職位がおかれた。唐通事の人たちはその時の中国語—唐話を学び、日本語を唐話に訳すという仕事をした。（六角恒廣（1984）と何盛三（1935）による）

教育はほとんどみられなかった」が実用主義の言語の教育であったのに対して、「主として第二期にいたって、語学としての新しい学問的成果が生まれてきた」<sup>3</sup>のである。だが、主に政治、経済、軍事の需要に応じるものをあげる第一期にも、すべての研究は活用できる会話のようなものに限定するとは限らない。それに、会話を身に付ける焦点はすべての教科書にとって同一になるとは限らないことや、その頃何か変化があるかどうかなども問題になる。それゆえ、その時期的区分及び特徴に対しても、近代日本の中国語教育の変化や発展に対しても、関連資料における言語の考察が必要であろう。

当時の中国語関係書は「中国に代ってある年代の言語や風俗を記録したものとして素晴らしい価値をもつ」<sup>4</sup>と同時に、日本人の学習した中国語の実態及び特徴を明らかにするために重要である。日本において中国語関係書は非常に多くあり、種類も様々である。『中国語関係書書目』によると、1867年及び明治期の各種類の中国語関係書は316点、大正時代から1945年までは1121点ある<sup>5</sup>。それゆえ、それらの資料における語彙の研究をする前に、研究の対象とする代表的なものを取り出すのが第一の仕事である。

本論は、『北京官話萬物聲音附感投詞及音須知』（以下、『萬物聲音』と略称）と『北京語の味』<sup>6</sup>における擬声語の検討を通して、近代日本の中国語教育の特徴を論じる。

『萬物聲音』と『北京語の味』は両者とも近代日本の中国語教育の第1期に属する<sup>7</sup>。しかし、1906年の『萬物聲音』と1941年の『北京語の味』は35年の間隔を持って出版されているため、近代日本の中国語教育の歴史的な状況を反映している可能性を持つであろう。『萬物聲音』は擬声語を主とする中国語教育関係書<sup>8</sup>であり、北京官話を「研究せんとする者の参考になす」<sup>9</sup>という目的で編纂された。それに対して、『北京語の味』は「何等かの意味に於て皆様の北京語研究にお役に立てば此上ない幸ひであると思つて」<sup>10</sup>、語彙だけでなく、他の多くの分野で、中国語と中国の事物を紹介したものである。著者の大山聖華は『北京語の味』には「擬音一覧」という節を設置し、特に擬声語を取り上げた。筆者の調べたところ、この二書ほど多量の擬声語を収載しているものは近代日本の中国語関係書の中で他にない。それゆえ、これは注目に値する現象であろう。

<sup>3</sup> 六角恒廣『近代日本の中国語教育』不二出版1984年10頁

<sup>4</sup> 波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊・第一巻』1984年の「序」による。

<sup>5</sup> 六角恒廣の説明であり、未見のものも存在するかもしれないので、この点数は確定的ではない。

<sup>6</sup> 『萬物聲音』瀬上恕治徳興堂印字局1906年。『北京語の味』大山聖華1941年 中華法令編印館。

<sup>7</sup> 中国語関係書目の分類、『萬物聲音』と『北京語の味』の類別は六角恒廣（1991/1994/2001）と波多野太郎（1984）を参考とする。

<sup>8</sup> 『萬物聲音』は六章からなる。第一章は感嘆詞及び用例である。第二章から第六章までが擬声語である。

<sup>9</sup> 瀬上恕治『萬物聲音』8頁

<sup>10</sup> 大山聖華『北京語の味』7頁

## 1.2 研究のテーマ

外国語を勉強するとき、擬声語は比較的難しい分野である。特殊な一つの語類として、擬声語の音義関係は顕著な特徴で、使用状況も複雑である。中国語擬声語は日本語のそれと比べると、語数がやや少ないとはいえ、同様に豊富であるといえる。

尾崎実(2007)が述べたように、「教科書は一定の編集方針にしたがい、一定の方向を持っているものであると見れば、現実社会に対する反映の最もよくあらわされているもののひとつであるからでもある」<sup>11</sup>ため、中国語の歴史的な実態と「中国語の日常語の変遷の一斑」を記録したのみでなく、日本の中国語教育の状況も反映している。それゆえ、本論は当時の教科書(テキスト)及びその内容の研究を通して、近代日本の中国語教育の特徴を考察する課題としている。

次に、近代日本の中国語教育は時代の背景に応じた実用的な会話を対象にして行われたことが六角恒廣(1989)などによく論じられた。だが、政治・経済・軍事の活動に依存していた中国語教育の性格を判明することによって、社会背景のほか、重要な要素とする言語認識に関連する考察も重視されるべきであろう。それでは、中国語教科書の言語を具体的かつ全面的に分析して、中国語教育の状況を検討することが進められるであろう。しかし、まだ多くの中国語関係書が注意されていなく、それらの文献の言語研究にもたくさんの不足の分野が残されている。

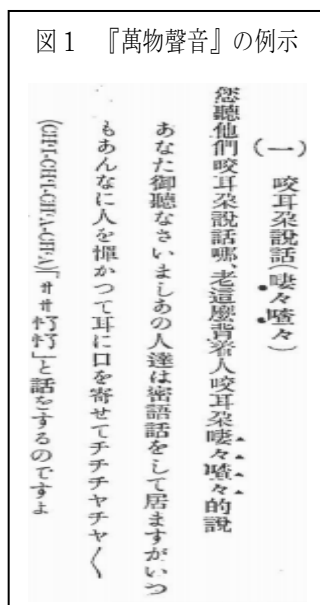
中国語は日本語と異なる語音系統に属する。そのため、同じ自然音を模倣する場合、近似の言語音を持つ擬声語があるが、全くと言ってよい程異なるものが大部分である。音(言語音)によって義(自然音)を表わすのが擬声語の特徴であるとはいえ、母語の習得に基づく擬声の経験は外国語の擬声語の学習において適用できないことが一般的である。従って、外国語教育の角度で、中国語関係書における擬声語の特徴と教育の状況を検討する意味があるであろう。また、近代日本の中国語教育では、擬声語は何の位置に付けられたか、どれほど中国語教育の性格を表現できるかは問題になる。現在でも様々に議論されている語群である擬声語は、近代日本の中国語の語識の考察にとって切り口の一つとされる。

## 2 テキストと擬声語の関係

### 2.1 テキストの内容

『萬物聲音』は当時陸軍清語通訳官であった瀬上恕治の作で、明治39年(1906年)12月に

図1 『萬物聲音』の例示



<sup>11</sup> 尾崎実「普通話常用詞の変遷—清末・民国時代の語彙と現代語語彙—」(『尾崎実中国語学論集』好文出版 2007年 51頁)

北京・徳興堂印字局により発行された。当書の中に、清国駐屯軍司令官陸軍少将仙波太郎の「叙」（明治三十八年三月七日）、北京駐屯歩兵隊長山本延身の「叙」（明治三十八年三月六日）及び瀬上恕治の「例書」（明治三十八年三月北京玉川橋畔に於て）、「支那官話合聲字母表」と「支那官話字母反切表」と「官話合聲發音心得」などが載っている。『万物聲音』の具体的な紹介は六角恒廣の『中国語書誌』<sup>12</sup>の「71 北京官話萬物聲音附感投詞及發音須知」（112頁）に次の記述がある。

瀬上恕治著、明治三十九年一二月、北京・徳興堂印字局発行。四六判、叙文五頁、例言四頁、字母表・反切表各一折、發音心得一五頁、本文一〇二頁。国会図書館蔵。この本は、嘆詞および事物や禽獣の音声の擬声語を集めたばかりでなく、それを王照の官話合声字母とウェード式記号で表音してある点で、きわめて稀な珍本といえよう。第一章は感投詞、第二章は動作の擬音語、第三章は物の発する擬声語、第四章は鳥の擬声語、第五章は獣類の擬声語、第六章は虫の擬声語である。

上記のように、『万物聲音』の第一章は中国語の間投詞を紹介している。内容の主体である第二章から第六章までの擬声語は基本的に一語一例（図1）で、約130余りの語が挙げられているが、その中で「物體と物體との摩擦により起こる音聲」の種類の語数をもっとも多く、約70語で半数以上である。その中に挙げられた自然音の種類は103類であるが、それに対応する擬声語の使用度数が136回で、擬声語の語数は126語<sup>13</sup>である。第一章は間投詞の用例をあげて、その発音をカタカナ・官話合声字母・ウェード式ローマ字により表記され、その用法を解説している。

『万物聲音』は「支那官話合聲字母表」、「支那官話合聲字母反切表」と「官話合聲發音心得」で、官話合声字母の五十音と十二喉音、ウェード式ローマ字、日本語のカタカナの三種の表記関係を詳細に紹介している。

一方、『北京語の味』は大山聖華により編纂され、昭和16年（1941年）8月に北京・中華法令編印館により刊行された。この書の序文は橋川時雄（北京餘園精舎にて）、村上知行と趙壽芝（中華民國三十年二月十五日）によって別々書かれた3篇のもの、大山聖華の「自序」（昭和十六年二月十五日北京善果寺無礙庵にて）がある。当書の内容は「語學修得の要諦」「會話篇」「語彙篇」「研究篇」「雜録篇」「寫真と繪圖」などの部分に分けて、中国の当時の社会風俗や文化、

<sup>12</sup> 不二出版 1994年

<sup>13</sup> この中で、AA型（「啊々」のように、両字が同じである語の種類）とAAAA型（「啊々啊々」のような四つの同じ用字を持つ類型）、AB型（「咄咄」のような二字の擬声語）とABAB型（「咄咄々々」のような四字の擬声語）の区分が不明確なところが多く存在しているため、この数も絶対的なものではない。

生活場面の会話などを記録した言語教育の教科書で<sup>14</sup>、中国語の語彙のほかに、文法、修辭にも触れている。擬声語を記録する「擬音一覧」という節は「研究篇」の中にある<sup>15</sup>。『北京語の味』における中国語の発音の表記は『萬物聲音』と同様、ウェード式ローマ字、注音符号<sup>16</sup>とカタカナからなる。

『北京語の味』はただ自然音及び注音符号で表記される発音の擬声語を並べるだけで、擬声語の用例が付いていない。例えば、「狗(犬)メウ メウ」、「喇叭メY メY」、「物之下落声(物を落とした時)ㄅメ カメㄌ」などである。このように、「擬音一覧」は92語<sup>17</sup>の擬声語を挙げている。それらの擬声語は89類の自然音を表している。「擬音一覧」の擬声語のほかに、「嘎吱嘎吱・咕摟咕摟・吧嘰吧嘰・嘎嘞兒嘎嘞兒・唧唧咕咕・唧唧喳喳・嘟嘟喃喃・碰璫」などがある。

最後に、『萬物聲音』と『北京語の味』の版本などの情況が表1で示している。

表1 『萬物聲音』と『北京語の味』の版本などの情況

書名	発行年	発行所	教科書の性質 <sup>18</sup>	表記方法	自然音の種類	擬声語の語数
『萬物聲音』	1906年 (明治39年)	北京・徳興堂 印字局	一般学習書(六角恒 廣)・白話研究(波多 野太郎)	ウェード式ローマ字 唸唸字母 カタカナ	103種	126語
『北京語の味』	1941年 (昭和16年)	北京・中華法 令編印館	一般学習書(六角恒 廣)・白話研究(波多 野太郎)	ウェード式ローマ字 注音符号 カタカナ	89種	100語

<sup>14</sup> 『北京語の味』における趙壽芝の「序文」は、『北京語の味』の内容について、“舉凡居家風俗種々、無不畢具無遺、實研究華語之捷徑、亦通曉華俗之秘笈也(いろいろな日常生活の場面と風俗は全面的に揃って記録される。本書は中国語研究のための捷徑であり、中国語を通曉する貴重なものでも一筆者に訳す)”と述べている。

<sup>15</sup> 「擬音一覧」の擬声語の他に、8つの擬声語は、『北京語の味』に所載している。それらはそれぞれ嘎吱嘎吱・咕摟咕摟・吧嘰吧嘰・嘎嘞兒嘎嘞兒・唧唧咕咕・唧唧喳喳・嘟嘟喃喃・碰璫である。本論は主に「擬音一覧」の擬声語を検討する。

<sup>16</sup> 表音の字母で、1913年3月に民国教育部の讀音統一会で統一され、1918年11月に公布された。その後、修訂されたことがある。「注音符号」という名称は1930年に使われ始めた。それ以前は、注音字母と呼ばれていた。

<sup>17</sup> ABABAAB型の「ㄍㄌ ㄎㄩ ㄍㄌ ㄎㄩ ㄍㄌ ㄍㄌ ㄎㄩ」のような複合型は2語とされて計算する。

<sup>18</sup> 六角恒廣編・解題1991『中国語教本類集成』と波多野太郎編・解題(1984)『中国語学資料叢刊』の分類による。

## 2.2 編纂目的と擬声語の関係

擬声語は言語音で自然音を模倣するものである。それゆえ、発音で意味を表すという特徴こそが擬声語の特殊性の一つである。それは発音を中心とするある言語の語音の使用状況をよりよく直接に表現できるであろう。それで、『萬物聲音』と『北京語の味』はどんな目的を持って擬声語の教育を行ったのか。

『萬物聲音』を著した目的について、瀬上は「例書」の中に「我邦人のなす北京官話の対話に充分の潤色をなすの資料たると共に其音声につき彼我両国音の対照比較をなし其差異変化などにつき研究せんとする者の参考となすにあり」と書いている。これにより、会話を潤色する擬声語の学習を通して、日中両国の言語の相違を知ることができるかもしれない。

また、瀬上の著書編纂目的と『萬物聲音』のテキストの特徴に関して、山本延身は「叙」に次のように述べている。

我邦清語研究者の最も難とする所のものは北京官話の發音なりとす此書は即ち北京官話の發音に關し其音源を官話字母表其他に依り簡明適切に説明をなし且つ感投詞及び諸種の有生物無生物の發音音響に就き記述せるものにして本邦人の用ふる北京官話に潤飾を施すの資料に供すへき良書たり

上に述べたように、北京官話の発音は最も難しいため、その教育は北京官話の発音に習熟するというところに重点を置いている。

ほかに、間投詞は喜怒哀楽を表すという意味の特徴で擬声語と異なるが、「唉」「噯喲」「嘻」などのように、人の発する声を如実に模擬するという点で、擬声語と同様である。これは瀬上恕治が『萬物聲音』で擬声語と間投詞を一緒に挙げる理由の一つであろう。

しかし、もう一步進んで『萬物聲音』の編纂目的を考えると、当時の社会背景が考慮されなければならない。『萬物聲音』における仙波太郎の「叙」に、「相隔る一葦上古已に聘問を通し其學を師承し融合して一種の文明をなす稱して同文の國と曰ふ」日中両国は、言語の隔膜相通の問題によって「兩國の交渉貿易其他の間に憂々入り難きの弊あるを致す」のである。そのため、中国語の学習はとても必要なことである。また、六角恒廣(1989)の述べたように、当時日中両国の経済進出、戦争(日露戦争)の勃発などで、交渉が緊密になったため、中国語の教育は政治・経済・軍事の活動に依存していた。それによって、当時の中国語教育は「通訳養成と日清の協力」や「富強を求めて」などのような実用主義の性格を持っていると言える。しかし、社会背景の考察だけが全面ではないかもしれない。そのため、言語面の考察も必要である。

一方、大山聖華の『北京語の味』の編纂目的は「自序」によると、次のようである

本書は私が吸ひ込まれる様に北京語の研究をしてゐる間に書留めたものを収録した雑記にすぎませんが、この不束な一書が何等かの意味に於て皆様の北京語研究にお役に立

てば此上ない幸ひであると思つてゐます。本書は私に北京語研究の動機を與へ且つ物心共に援助をして下さつた本間誠中佐に献げる私の報告書であります。

これにより、『北京語の味』は北京語研究のためのものであることがわかる。本書は「一を知ることによつて十を察し得るといふ立派な入門書である」<sup>19</sup>が、内容は豊富である。それによつて、『北京語の味』は言語学習のためのものでもあり、当時の中国の社会や歴史などを紹介する資料でもあると見てもよいであろう。

『北京語の味』の編纂時代は「中国語学教育や中国語学研究の方向が次第に科学的なものへと胎動し始めてきた」<sup>20</sup>時であつたが、当時の中国語教育は会話を中心とし、生活会話を内容の中心とし、経験主義的な方法で行われてきた<sup>21</sup>。京語の味』の細目次の後ろに、「北京語の味 標語」<sup>22</sup>という標記があり、

使ふなら正しい北京語を！でなかつたら美しい日本語を！

と書かれている。この意味で、本書はできるだけ正しい中国語を使ってすべての物事を表し、あるいは少なくともその言語を使用できるのを目指しているため、中国語の日本語訳語の表現を鍛え上げたであろう。しかし、正しい北京語を身につけることは容易ではないことが意識されているようであるため、擬声語を語彙の学習の一面として取り上げ、その発音を注音符で表記し、その意味（自然音）を詳しく付ける。それに、擬声語は言語音で自然音を模倣するものであるため、それは語音の特徴を表現することに対して、便利な語群であろう。そのせいか、『北京語の味』で擬声語は何かテーマとして詳細に解説されていないし、別の特定の研究目的を持っていない。だが、擬声語を一覧に集め、当時の注音符号を利用し表記するという特徴から見ると、それは北京語の実態の一面を記録することに対して、有意義である。

従つて、『萬物聲音』と『北京語の味』は内容も編纂方法も異なるが、両者とも北京語の言語学習の資料として、同じの中国語教育の志を持っているようである。擬声語の視点からいうと、それは語音への関心である。擬声語が特別な存在として注目されることは近代日本の中国語教育でも珍しい現象であろう。

### 2.3 テキストの編纂方法・擬声語の収集方法

『萬物聲音』の内容及び形式の設置についての説明は本書の中にあるが、編纂方法・内容参照に関する解説などは見られない。それでは、『萬物聲音』の間投詞と擬声語はどの方法で集めら

<sup>19</sup> 『北京語の味』における村上知行の「序文」（波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊白話研究篇・第二卷』不二出版 1984年2頁）を参考とした。

<sup>20</sup> 六角恒廣（1989年38頁）

<sup>21</sup> 六角恒廣（1989）（『中国語教育史論考』不二出版）による。

<sup>22</sup> 波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊白話研究篇・第二卷』不二出版 1984年6頁

れたのかがわからない。だが、先行研究と筆者の調べた限りによって<sup>23</sup>明治期の中国語教育関係書の『萬物聲音』は珍しい擬声語の専門書であることがわかる。表記方法でも擬声語の用例でも、それ以前の資料に同じあるいは類似の特徴を持つものは見られない。また、間投詞の用例<sup>24</sup>擬声語の用例（中国語の例文及び対応する日本語訳文）の出典がわからない。そのため、この本は何かの資料を参考として作られたか、それとも瀬上恕治自身の経験あるいは体験によるものであるかがわからない。

『萬物聲音』の擬声語は特殊な用字の特徴は非常に顕著である。例えば、“嘸”“啍”“啵”“叻”“嘸”などの用字は擬声語の専用の漢字のようなものであるが、中国語の既成したものではなく、瀬上が作字した可能性がある<sup>25</sup>そのため、可能的な結果の一つとして、『萬物聲音』は欧米人によって作られた中国語学習書などを参考として偏されるものではないのである。

『萬物聲音』に対して、「北京語の味」では、大山聖華は「自分の経験のままを述べたように書いたものだ」<sup>26</sup>している。このことは、村上知行の「序文」<sup>27</sup>も、「氏（大山聖華—筆者注）が従来發刊されてある辞典と會話書とを一応抛棄して、直接中国人の日常の談話の中に躍り込んだ」とある。つまり、本書の擬声語も大山が日常話されていた北京語から収集されたものであろう。

「北京語の味」の内容は「一 語學修得の要諦」や、「二 會話篇」、「三 語彙篇」「四 研究篇」などからなっているが、「雑然とならべた」<sup>28</sup>ところは確かにある。大山の言葉によれば、それは彼が1年足らずの短い間に用紙の上に膨大に書き留めた内容を整理したものであるからである。

このように、『北京語の味』と『萬物聲音』の擬声語の収集方法は同様で、「活きた言葉が、活

<sup>23</sup> 調査の資料は主に『中国語教本類集成』の一般学習書（『中国語教本類集成』の第1集と第2集のものを指す）と、『中国語学資料叢刊白話研究篇』（波多野太郎編・解題不二出版1984年）に載っているものである。

<sup>24</sup> 例えば、「唉」の多義によって9つの用例を挙げてある。『史記』の1例の以外はすべて出典がない日常用語である。

<sup>25</sup> この点について、中国語近代と古代の文字、擬声語に関する資料を調査してもう一步踏み込んだ検討の必要がある。

<sup>26</sup> 『北京語の味』における橋川時雄の「序文」（波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊白話研究篇・第二卷』不二出版1984年2頁）を参考とする。

<sup>27</sup> 『北京語の味』における村上知行の「序文」（波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊白話研究篇・第二卷』不二出版1984年2頁）を参考。

<sup>28</sup> 『北京語の味』の「讀者の皆様へ」（波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊白話研究篇・第二卷』不二出版1984年160頁）による。似た意味で、大山聖華は「讀者の皆様へ」でも「組み方の不體裁な点」という謙る表現をしている。



きた方法で配列されてあるということであつた」<sup>29</sup>言い換えると、両者とも「経験主義的中国語教育精神によってできた教科書である」<sup>30</sup>とはいえ、その中に所謂語学の努力が見られる。

## 2.4 テキストへの中国人の関与

瀬上恕治は、「例書」で、『萬物聲音』の校閲者の中に中国人たちもいた旨を述べている。彼らは当時駐北京公使館書記官の鄭永邦と前東京外国語学校講師で当時の北京清語同学会首席教員の金国璞である。鄭永邦は日本に定住し、代々唐通事の通訳を稼業とした鄭家<sup>31</sup>一員であり、母語が中国語である金国璞とは少し異なっていたが、2人を本物の中国語教師と見なすのは一般的な考えである。ゆえに、彼らの参与は、『萬物聲音』の内容に信憑性を与えるとともに、実効のある編纂方法であろう。この現象は『北京語の味』にもある。

『北京語の味』の中に、大山聖華は「自序」で出版に至るまでに彼の北京語研究を助けた人たちに捧げた謝辞に、中国人の趙養泉、趙豫英、趙壽芝の名を挙げた。しかも、趙壽芝は本書に一篇の序文を書いた。中国語を身に付ける彼らは『北京語の味』の編纂にあたり言葉の校正や、内容の校閲などの手伝いをした可能性がある。そのため、擬声語の発音、用字、意味は記録の方法で、信憑性あるいは合理性は存在するはずである。

## 2.5 まとめ

以上、擬声語教育の4つの面から、近代日本人の中国語教育関係書の『萬物聲音』と『北京語の味』の特徴と、擬声語の収録特徴を紹介した。これによって、『萬物聲音』と『北京語の味』は35年の隔たりはあるが、言語の収集や、テキストの性質、編纂目的と方法などの面で、一致している特徴を持っていることがわかる。一方、テキストの言語の考察が具体的に擬声語を分析の対象として考慮に入れてみると、その特徴はどのようになるだろう。

## 3 『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語

語彙面から中国語教育の通時の特徴を分析するには、中国語関係書の中の言葉の特徴を知る必要がある。そこで、本節では『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語の表記形式や、例示方法、意味分野の類別などを検討する。

### 3.1 擬声語の語例及び発音の表記方法

『萬物聲音』には、擬声語は間投詞と同様、基本的に一語一例で紹介されている。間投詞と擬声語の例は次のようになる。

<sup>29</sup> 『北京語の味』における村上知行の「序文」による。

<sup>30</sup> 六角恒廣(1989年 43頁)を参考。

<sup>31</sup> 徐麗『日本明治時期漢語教科書研究—以『官話指南』、『談論新篇』、『官話急就篇』為中心』(博士学位論文)(2014年 48頁)による。

## (1) 嗒 (ハイ) (HAI) (ㄏㄞ)

嗒可惜呀

ハイ惜しい事だ (それはまあ……) (『萬物聲音』23頁)

## (2) (十一) 小車子 (啞々 ㄞㄞ)

推小車子是啞々 ㄞㄞ 的響更討厭了。

一輪車を推すときは其音はツウツニユウニユウ (TZU- TZU- NIU- NIU) ㄗㄨㄨ ㄗㄨㄨ ㄋㄩㄨ ㄋㄩㄨ  
ㄞ ㄞ と響きまして一入忌なものです。(『萬物聲音』第三章 67頁)

例文で示したように、『萬物聲音』の間投詞と擬声語の「音解」<sup>32</sup>日本語のカタカナ、ウェード式ローマ字、王照の官話合声字母からなる。この発音表記形式は珍しいため、本書は「きわめて稀な珍本」<sup>33</sup>あるとされる。官話合声字母とローマ字表記は当時の中国で北京官話の発音を記録する方法として最も広く使用されていた。それは中国語擬声語の記録にとっても、日本人の北京官話の学習にとっても実用的かつ正確なものである。カタカナ表記は外国語を表音するものとして、日本の中国語教育の一般的な方法である。それゆえ、この「音解」の現象は当時の擬音擬声語の実態を反映するとともに、日本人が教授した北京官話の状況を知ることに関与してあろう。他に、それは中国語教育の特徴であるというより、擬声語という語群の特殊性に適した教育方法であったというほうが適切であろう。

『萬物聲音』と同様に、『北京語の味』に使われた表記方法も日本語のカタカナ、ウェード式ローマ字、注音符号の3つである。注音符号は当時普及していた表音字母であり、中華民国政府により1918年に発布された。その後、何回かの修訂・補訂をした<sup>34</sup>とがある。実際は、『北京語の味』の時代でも、注音符号の方法が多くの中国語教科書に採用された。

『北京語の味』では、擬声語の用例が載っていないが、ただ対応する自然音及び言語音を表記する注音符号がある。例をあげると、「鳥鳴 (からす) Y- Y- (AI AI<sup>35</sup>)」、「風が葉にあたる音 ㄩㄨㄨ ㄩㄨㄨ (SHUA SHUA)」、「物之下落声 (物を落とした時) ㄎㄨ ㄎㄨㄥ (K'U

<sup>32</sup> 清国駐屯軍司令官陸軍少将の仙波太郎の作った「叙」(『萬物聲音』1-3頁)の言葉(2頁)にある。この部分の原文は「卷首に王氏の合聲字母表拼音表を掲げ次に各種の感投詞と所有有生非生各物の聲音に及び一々例を示し且付するに譯語と音解を以てす」である。その中に、「譯語と音解」という語がある。

<sup>33</sup> 六角恒廣(1994年 112頁)

<sup>34</sup> 『周有光語文論集第一卷』67-75頁を参考。

<sup>35</sup> ウェード式ローマ字表記である。この表記は筆者が『北京語の味』の解説によってつけた。

TUNG)」などがある。他に、本書は「語學修得の要諦・注音符號解説」<sup>36</sup>の節で、日本語のカタカナ、ウェード式ローマ字、注音符號の対応関係を紹介しているため、中国語擬声語の発音をよく知ることができる。

従って、『萬物聲音』と『北京語の味』の表記方法は同じ特徴を持つ。官話合声字母も注音符號もそれぞれの時代の「生きた方法」<sup>37</sup>ある。それは擬声語の語類の特性に適した作り方でもあると考える。つまり、この表記方法は時代なりの方法で、特定の言語分野(語類)・方向に適応する方法を反映するものである。それで、『萬物聲音』で言葉の発音を中心とする中国語の教育における言語意識と中国語研究の態度は見える。

### 3.2 擬声語の用例・語釈

上に言及したように、『萬物聲音』の擬声語は一語一例の方法で紹介している。『北京語の味』は注音符號の表音方法で擬声語を表わす。『萬物聲音』と比べると、『北京語の味』には擬声語の用例がない。そのため、用例の有無はその2者の相違点である。しかし、擬声語の用例はその意味を表現することに対する顕著な作用が見られない。

日本語擬声語の意味特徴に比べて、中国語擬声語にはかなり大まかで包括的であるという傾向がある。つまり、一つの擬声語は何種類の自然音を模倣することがよく見られる。『萬物聲音』と『北京語の味』には、大多数の擬声語は自然音の項目との対応関係が一对一である。だが、表2と表3に示したように、一つの擬声語は複数の自然音(現象)を表現している場合もある。

この例示方法は単語の意味を解釈することに役立つ。もう一步言うと、この方法は、語の意味をよく表現できると同時に、当時の実用主義の中国語教育に適しているものである。

表2 『萬物聲音』の擬声語の包括的な現象

擬声語	出典の章節	自然音(現象)
嘩喇	三・1・22・43*	開水壺・裁紙疊紙・流水
噶渣	三・5・17	雷閃雷鳴・木頭木板掉地
叭々叭々	三・24、六・1・3	帶琴的風箏・蜜蜂・蒼蠅
根兒根兒	二・7、四・5	婦人笑聲・公雞
爬達	三・38・41	拿棍子打人・石頭片落在瓦上
吧達	二・9、三・18	喫煙・小物件掉地
咕啞	三・35、四・16	煙筒冒煙・鸽子
咕嚕々々	三・5・41	雷閃雷鳴・石頭片落上
咣當	三・12・31	廠車・關上門
嘎吱々々	三・8・15	皂鞋・扁擔
嚕達々々	三・6・20	錶・磨面
倏兒々々	三・44・45	雨聲(小)・雪聲
吱兒	四・9、五・7	老雞・豬
唸兒	三・22・48	裁紙疊紙・撕布聲
噹々々々	三・7・29	鐘(大)・鈴兒
嘩阿	三・43・44	流水・雨聲(大)

\*漢數字は章番号を表わし、アラビア數字はテキストの中で標記された順番を指す。

<sup>36</sup> 『中国語学資料叢刊白話研究篇・第二卷』8-13頁による。

<sup>37</sup> 『北京語の味』の趙壽芝の「序文」を参考。

### 3.3 擬声語が描写している自然音

自然音の分類によって、瀬上恕治は『萬物聲音』の「例文」で、人と動物の声を表わすもの、人の動作に関わるもの、物体と自然現象に関わるものなどの意味分野から、擬声語をまとめた述べている。そして、それらの意味分野の下位分類を「人の動作に因り起こる音聲」、「物体と物体との摩擦により起こる音聲」、「鳥類の鳴聲」、「獸類の鳴嘯の聲」、「蟲類の鳴く音」に分けて擬声語を並べていた。

『北京語の味』の「擬音一覧」は自然音の分野を表明しないまま、ただ(一)～(六)と標記して擬声語をあげる。しかし、各部分の擬声語の特徴から見ると、それらの意味分野は動物の声、人が発する声、無生物に関わる音、自然現象に関わる音、動作に関わる音などと分けていることがわかる。そのため、『北京語の味』が載っている擬声語の意味分野は『萬物聲音』と同じ特徴を持っていることがわかる。つまり、『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の分類方法は似ている。

『萬物聲音』の擬声語に対応する自然音は103類あるのに対して、『北京語の味』の場合は89類ある。また、擬声語の語数を計算すると、『萬物聲音』は126語であり、『北京語の味』は92語である<sup>38</sup>それゆえ、その両者の擬声語の語数に大きい差はない。擬声語の種類をさらに分類して見ると、『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語の中に、意味が明確ではないものがある。

例えば、『萬物聲音』における人の動作に関わる自然音(第二章の擬声語は主としてこの種類のものである)には、内緒話をする声((一)咬耳朵説話「嗚々啞々」と口の利けない人の話し声((二)啞叭“啊々啊々”)のような人が発する声があり、“洋喇叭”(ラッパ)のような無生物が発する音((八)洋喇叭“嗚々嗚一嗚々嗚”“問兒嘖”)もあり、喫煙の音((九)喫煙“吧嗚々々”)のような動作によって発する音もある。実はそれらは異なる意味分野に属するものである。同様に、『北京語の味』の(一)に載っている自然音は基本的に動

表3 『北京語の味』の擬声語の包括的な現象

擬声語	ローマ字表記 <sup>*</sup>	自然音現象
ㄐㄐ	JIJJ	家雀兒(雀)・耗子(鼠)
ㄗㄗ	ÈA ÈA	騾子(馬)・驢子(驢)・驢(驢)
ㄨㄨ	KUAKUA	鴨子(アヒル)・蛤蟆(蛙)
ㄆㄆ	PAPA	呻聲(呻)・拍掌聲(拍手の音)・打嘴聲(頰を打つ音)
ㄊㄊ	TINGTANG	九音鑼・打冰盞兒
ㄆㄆ	TSəh TSəh	喇叭的(内をぶぶす時)・喇叭(キリギリス)
ㄐㄐ	TSəh TSəh	噴嚏・鋸木聲(木の鋸く音)・裂聲(布を裂く音)・切菜聲(包丁で切る音)
ㄊㄊ	TUANG TUANG	打銅鑼・瓷器摩擦聲
ㄊㄊ	TUANG TUANG	鐵錘聲(錘)・打後聲(背中などを叩く音)
ㄊㄊ	TUNG TUNG (TUNG)	鼓(太鼓)・磨車(自動自轉車)
ㄨㄨ	WAWA	小孩兒(子供)・喇叭
ㄨㄨ	WENG WENG	牛・蜂・飛機

\* ウェード式ローマ字表記である。この表記は筆者が『北京語の味』の解説によってつけた。

<sup>38</sup> この統計は注12に挙げた8つの擬声語の状況を入れていない。

物の声であるが、「喧嘩する時」の声と“小孩兒”の声などの人の声も入っている。

### 3.4 擬声語の特徴

『萬物聲音』と『北京語の味』に載っている擬声語の発音表記はとても顕著な特徴である。言語音（発音）は自然音（意味）と深く関わるのが擬声語の顕著な語類特徴であるため、擬声語の発音がよく注意される必要であろう。そのため、『萬物聲音』と『北京語の味』は擬声語の注音を表示するため、3種類の方法を使っている。また、擬声語の語例は自然音の現象と合わせて挙げていることが擬声語の意味を理解するにあって、とって非常に便利かつ有効な方法である。しかし、『萬物聲音』と『北京語の味』の擬声語が模倣している自然音の種類をみると、両者が記録する同じ自然音（現象）が多くあり、種類数の差は大きくない。

以上のように、『萬物聲音』と『北京語の味』は、擬声語を語音、語義と表記符号の使用で深く、詳細に紹介する。その中に、言語特徴や学習方法などを探究した努力は中国語を実用的なものとして身につけるためであるのみならず、言語分析・研究の志向も含んでいる。それによって、それは近代日本の中国語教育の態度であるとしている。ただ、それらの資料は一体語学をどのくらい程で進めていたかも問題である。そのため、音節パターンの特徴や、音韻構成の特徴、意味分野の特徴などを擬声語の考察に入れて行くと、中国語擬声語の特徴はさらに明確になれるかもしれない。

## 4 終わり

近代日本の中国語教育に関する研究は六角恒廣を代表とする研究者によって行われている。本論は擬声語の視点で近代日本の中国語関係書における言語の特徴を検討し、近代日本の中国語教育及びその関係書の状況を論じた。

他の語群と比べると、擬声語は言語音を直接に利用して、自然音を模倣し、その意味を表わすことで、独特であると言える。それゆえ、近代日本の中国語関係書における擬声語の考察を通して、日本人が中国語の教授・学習の現状と中国語への言語認識を考察することが有意義な試みであろう。

本論で、擬声語の収集方法も中国人の編纂参与の点からも、『萬物聲音』と『北京語の味』は「活きた言葉が、活きた方法で配列されてある」<sup>39</sup>のとして、信憑性のある資料である。その「活きた言葉」の中国語（擬声語）の学習は発音を最も重要な位置に付けている。外国語とする中国語の学習は、「言語の基礎となる音で読むこと、つまり中国語を発音してみることが第一に必要である。これは漢文のもつ表意性から離れて、ことばとしての中国語を意識する第一歩である」<sup>40</sup>これは言語学習の原点の1つであるとともに、とりわけ擬声語には適用する学習方法である

<sup>39</sup> 『北京語の味』における村上知行の「序文」による。

<sup>40</sup> 六角恒廣（2002年170頁）

う。『萬物聲音』と『北京語の味』の出版は35年の間隔があるにもかかわらず、中国語の学習書とする編纂の目的と方法は一致する点を持っている。その一致性には、時代による変化・発展の特徴も存在するといえるため、近代日本の中国語教育は「停滞性」<sup>41</sup>程になっていないと考える。

『萬物聲音』と『北京語の味』における擬声語の分析を通して、近代日本の中国語教育は実用的中国語の習得に限らず、ある程度言語研究の努力もしていたことがわかる。

近代日本の中国語擬声語は一面で中国語教育の性格や変化などを映しているため、その研究の範囲を広げ、深度を深め、更に多く、具体的な関連課題を入れて行う必要がある。

## 参考文献

- 大山聖華 『北京語の味』, 北京: 中華法令編印館, 1941年
- 尾崎実 『尾崎実中国語学論集』, 東京: 好文出版, 2007年
- 瀬上恕治 『北京官話萬物聲音附感投詞及音須知』, 北京: 徳興堂印字局, 1906年
- 波多野太郎編・解題 『中国語学資料叢刊白話研究篇・第一巻』, 東京: 不二出版, 1984年
- 波多野太郎編・解題 『中国語学資料叢刊白話研究篇・第二巻』, 東京: 不二出版, 1984年
- 六角恒廣 『近代日本の中国語教育』, 東京: 不二出版, 1984年
- 六角恒廣 『中国語教育史論考』, 東京: 不二出版, 1989年
- 六角恒廣編・解題 『中国語教本類集成』, 東京: 不二出版, 1991年
- 六角恒廣 『中国語書誌』, 東京: 不二出版, 1994年
- 六角恒廣 『中国語関係書書目』(増補版), 東京: 不二出版, 2001年
- 六角恒廣 『中国語教育史稿拾遺』, 東京: 不二出版, 2002年
- 何盛三 『北京官話文法』, 東京: 東学社, 1935年
- 徐麗 「日本明治時期漢語教科書研究——以『官話指南』、『談論新篇』、『官話急就篇』為中心」(博士学位論文), 2014年
- 周有光 『周有光語文論集・第一巻』, 上海: 上海文化出版社, 2002年

<sup>41</sup> 六角(1989年42頁)による。六角恒廣は教育内容や教育法などから教科書の停滞性を論じた。それも中国語教育の停滞性を意味していると考えられる。